

1 里山と水田・稲作分科会 代表：渡邊英二

「水田・稲作」「生物・ビオトープ」分科会 ～田んぼが育む生きものと子供たち～

①茂原農業高校 農業土木部による報告



②田尻高校 岩淵氏 による基調講演



午後は、子どもたちが企画した谷津田・里山遊び

谷津田・里山は、 生きものだけでなく、 子どもたちも育んでいた



子どもスタッフ



人も生物多様性の要素

●課題: 同様の活動を他地域で実践していくには...

4. 里山と森林・林業

代表：神田忠弘

市民の暮らしと森林の未来 ～森をつくる地域循環型の暮らし～ 共催：東金市

●自然体験:
日 時 2005年4月30日(土)9:30～ 参加者 49名
受付時間: 東金文化会館エントランスホール
10:00～12:00 森林ウォッチング
花の森～あしたの森

●シンポジウム:
日 時 2005年4月30日(土)
会 場 東金文化会館2階会議室 参加者 53名
風 景 文 芸

リポーター:
吉岡 寛: 山武都市森林組合 組合長
東金市建設都市整備課 東金市経済環境部農政課
東金市経済環境部環境保全課
本間 一夫: さんむフォレスト
コーディネーター: 神田 忠弘: さんむフォレスト

その他パネル展示
東金市建設都市整備課 東金市経済環境部環境保全課
東金市経済環境部農政課 別荘環境情報センター
さんむフォレスト

プレゼント 東金市建設都市整備課から花の種をプレゼント



④高校生を含めた

パネルディスカッション

③むらおごしシニガー

田中卓二氏による歌



まとめ

1. 高校生のような若い力
2. 農村社会の人間関係の再構築
3. 農業をしながら自然を見る精神的なゆとり
4. 地域にあった人と自然が共生できる農法の確立

必要です

3. 里山と教育・学習分科会

代表：上善 純男

「里やまは人づくりの場」

●野外体験1

「里やま教室 野鳥観察と講話」
千葉市立みつわ台北小学校 4月29日(休) 参加105名
・講師: 小平哲夫(千葉県森林研究センター次長)
亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)

●野外体験2

「生協での自然教育英語」
千葉県立中央博物館生協部 5月7日(土) 参加26名
・講師: 中村啓彦(千葉県立中央博物館副館長)
林浩二(千葉県立中央博物館生協研究科)
亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)
平島真希(森林文化教育研究センター)

●シンポジウム

「自然体験はマアジじゃない」
千葉県立中央博物館講堂 5月7日(土) 参加133名

- ・里山と環境教育の意義: 大槻幸一郎(千葉県前副知事)
- ・自然体験はマアジでない理由:
中村啓彦(千葉県立中央博物館副館長)
- ・里山は人づくりの場: 亀井尊夫(東京大学名誉教授)
- ・パネルリスト:
亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)
中村(千代田より保育園園長)
深野誠(千葉県立種神医療センター長)
湯上真樹(森科イリスラボ)
- ・総合司会:
鈴木敦(NPOあひのネットワーク千葉)

・オカリナとギター演奏: 山口晴夫ほか
・わらべうた: たいさく保育園、たいさく保育園、たいさく保育園の園児のみなさん



なつき保育園 たいさく保育園の園児による「わらべうた」でシンポの会場が和む

4 まとめ: 地域循環型の暮らしが森をつくり、地域をつくる!

●現状

- ・戦後の無理な拡大造林の後、森林の手入れが出来ていない。
- ・東金市は市民による森づくりなど、市民の自然体験を支援している。
- ・山武形を活用した住まいづくりなど、地域循環による森林再生運動の実施。

●結論

- ・森林の木材生産以外の多面的機能を守るために人の手が入る必要がある。
- ・地域循環型の暮らし方が、地域の森や自然を守る力になることを再確認する。

●課題

- ・木質バイオマスエネルギーの利用など、森林が暮らしと結びつく仕組みづくりが必要である。
- ・林業が産業として成立する形で市民参加と行政の協力を考える必要がある。



2. 里山と生物・ビオトープ

～谷津田・里山における生物多様性の体験～

1

実施日: 2005年5月1日(日)
10:00～12:30: 観察会と生きもの調査実践
14:00～15:30: 子どもたちの企画による谷津田・里山遊び
参加者: 70名(2～75歳)

●趣言

人が過度に手を加えることによって、
生物多様性が維持されている「里山の自然」
<昨年> データをあげて学術的に評価

<今年>

- ・観察会・生きもの調査 → 生物多様性体験
- ・子どもの企画で里山遊び

↓
里山 = 安全で楽しい遊び場



観察会と生き物調査



里山生きもの調査(伊東 実 撮影)

3 まとめ: 里やま問題解決のキーワードは教育にあり!

●現状

- ・物豊かな社会になった反面、人の心の問題が深刻化
- ・子どものキレ・有様も増え、少年犯罪が増加
- ・子どもの遊び「里山の自然」の学びが減少
- ・「里やま・自然体験」が減少

●結論

- ・基層文化の根を揺らしてはならない。里やまの象徴は都市の高層につながる。
- ・里やまでの自然体験は人としての大膽をつくる。
- ・自然体験は子どもたちの個性を磨き、教育(生きる力)の原点オマケではない。
- ・子どもを選び、自然体験(時間・空間・仲間)の三つの確かな大人の責任

●課題

- ・学校教育における総合学習の重要性的な正しい認識
- ・社会教育が子どもの自然体験の場面に支援するか
- ・社会のなり様を子どもの視点で考える



5. 里山と竹

代表: 田代武男
里山と竹害について

●シンポジウム:
日時 4月30日(土) 10:00~12:00まで
場所 東金文化会館2階 第二会議室
参加者 22名

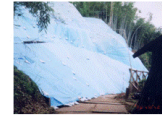
竹害についての説明
竹についての相談 質問の応答

メンバー
田代武男(竹研究会会長)
田中昭二(竹研究会理事)
林 正治(竹研究会理事)



5 まとめ 里山問題解決には竹の枯殺、竹林の整備が急務

- **現状**
 - 1 里山の美しい竹林は、日本の原風景である。「竹馬の友」とし、われわれのように、これまで子供と竹とは切っても切れない関係にあった。ところがこの4年間に里山をとりまく環境は大きく変化している。
 - 2 里山の荒廃の一因は、放置された竹林にある。放竹林は里山の生態系に悪い影響を与え、防火の面からその危険性が指摘されている。
- **結論**
 - 1 子供たちの健全な育成には、美しい里山、美しい竹林が欠かせない。
 - 2 里山を守るためには、竹の放殺、竹林の整備が急務である。
- **課題**
 - 1 竹は地下茎で繁殖する間、特性があり、常識的な対応では歯が立たない。竹に対する知識の普及が必要
 - 2 放竹林は生物多様性を低下させ、土砂災害を頻発させる。危険性への認識が求められる
 - 3 拡大する竹林を阻止するには、個人では無理である。行政あるいは研究機関に働きかけ、その対応が急務である



6. 里山と食

代表: 遠藤陽子
車座食談義 みんなで語ろう! 千葉の食

●自然体験:
日時 2006年5月14日(土)
会場 鴨川市 大山千枚田保存会棚田倶楽部
参加者 36名

1 大巻き寿司作り

指導 千葉県伝統土料理研究会
副指導 奥子さん、車塚 君子さん、杉崎 幸子さん、伊藤 実美子さん、山形 礼子さん

2 車座食談義「みんなで語ろう! 千葉の食」

パネラー 石田 三示さん(大山千枚田保存会理事長)
池田 恵美子さん(南総ふるさと発見まちづくり編集長)
菅沼 弘夫さん(子どもに学ぶ会代表)
平本 敏久さん(千葉の海と漁業を考える会代表)
美和輪 やいさん(元千葉県生活改良普及員)
山口 孝さん(地方公務員)
副司 美子さん(千葉県伝統土料理研究会会長)

コーディネーター 遠藤 陽子(千葉自然学校理事)



6. まとめ: 今、郷土料理や食について考えていること

- **現状**
 - * 先人の知恵を掘り起こし、伝える活動をやっている。食文化フォーラムを立ち上げた。
 - * 伝承活動を進めたいと、子どもを対象に食文化啓蒙事業に取り組んでいる。
 - * 子どもの頃の母の弁当が原点。子どもたちがいまの食をどう伝えるかが課題。
 - * 自分達だけが食べているおなじみのもの、暮らしに自信を持ち、これを外の人たちに伝えていきたい。
 - * 一律の栄養重視の食では、味覚が高たない。
 - * 千葉の海岸は全国ワースト。九十九里海岸の勢が失われている。
 - * 山武郡内の農家のお母さんたちが大巻き研究会を立ち上げ活動してきた。
- **課題と結論** 今後取り組むべきこと
 - * 千葉の郷土料理は多いが、食に対する情熱が弱い。
 - * 地元ではおかしな得意なおばあちゃん、まだまだ名産品がある。
 - * 地元の漁師は、ゴンズイ・ハコフグなどのおいしい食べ方を知っている。
 - * 地域のおいしいものを集め、弁当コンテストなどをやって、これをコミュニケーションビジネスとして提供がしたい。
 - * 棚田の米がなぜおいしいか? 棚田は地すべりの復興の産物。
 - * おいしいものをどう普及するか、それには価値観や経済行為の転換が必要。観光業者は一律の料理で知恵がない、だからフォーラムを立ち上げた。



7 里山と芸術・分科会

代表: 宮村 賢治
谷津田における人と自然とアートの出会い

日時: 5月15日(日) 10:00~15:00

場所: 大やぶ池谷津田(千葉市緑区越智町)

参加者数: 約80名

『工作ワークショップ〜ヤブのやばやらのや〜』

● **ドームをつくらう!**
竹を使ったドーム作りと園地財を利用した大きなテーブル作りを行いました。
* 講師: 横田耕明(グループ2000)

● **野草をひろふら!**
大やぶ池のまわりを散策して野草をとり、天ぷらにしてみました。またチャリカフェという移動式カフェも出現し、参加者に飲み物を提供するしました。
* 講師: 横田耕明・福田洋

● **楽器をつくらう!**
竹を使って楽器を作り、みんなで演奏しました。
* 講師: 小林正幸(ツディ工房)



まとめ: この谷津田がたくさんの人知って、来て、楽しんでもらおう!

- **現状**
 - * 千葉市内に住んでいる方たちにも「大やぶ池谷津田」のことがあまり知られていない。
 - * この谷津田に残土・産物を授業しようとする動きがある。
- **結論**
 - * この地域のことを、もっとたくさんの人たちには知ってもらう必要がある。
 - * この谷津田は自然豊かな素晴らしい場所。何かこの場所性を活かしたことをして欲しい。
 - * 子どもたちだけでなく、大人たちも取り込むような企画作りが大切になる。
 - * 一過性のイベントではなく、地域に根づくような活動を行っていることで、この場所の継続的な活用が図られる。
- **課題**
 - * この谷津田を多くの人知ってもらうために、どのような表現が考えられるか



野草の天ぷら

8. 里山と医療・福祉

代表: 横田耕明
谷津田における福祉の有り方と新たな相互理解や交流の試み

● **野外体験:**
日時: 5月15日(日) (雨天の場合は5月29日(日))
場所: 千葉市緑区土気大藪池谷津田

子ども何らかの障害のある方々を中心として作業を行う。参加者が個々の特徴を認め合い、助け合いながら楽しく活動することにより、地域福祉の在り方を探索する。

竹を使ったドームづくりと園地財を使った散歩
講師: 横田耕明(グループ2000)代表の横田耕明

野草をとり、てんぷらをする+屋食
参加者は谷津田を散策して野草を採り、随時てんぷらに食べて

チャリカフェで飲み物を振る舞う
(チャリカフェという移動式カフェ)

竹を使った楽器づくりとそれを弾いた演奏
ツディ工房 小林 正幸
里山の仲間たち 林



8 まとめ 工作ワークショップ・五月の谷津田における福祉活動

- **現状**
 - * 大藪池周辺には医療福祉施設が多い旧農村地域。
 - * 現在の美しい環境はNPOや地元住民の活動で維持されている。
- **結論**
 - * 小雨に100人前後が集合。自然福祉への関心の高さを確認。
 - * 五月の谷津田を存分に体験。予想を超える活発な交流と創造が実現した。
- **課題**
 - * 谷津田をフィールドにした地域福祉の基礎作り。
 - * 活動が根づくには地道な呼び掛けと定常的な実施が大切。
 - * 今年は夏と秋に行事を予定。



9 政策分科会 代表：小西由希子

里山と子ども

里山は創造力をふくらませる「場」

里山に子どもたちの声が響くと
光保育園

お母さんがつくれた
プレーパーク どんぐりの森

千葉市「子どもたちの森」



会場写真



10 まとめ

● 現状

- ・観光に合うよう努力しているもののゴミが多く、癒しにならない場合が多い
- ・里山のイメージは人それぞれあります。

● 結論

- ・当事者だけでなく、多くの人手も借りて、幅広い活動をしたい。

● 課題

- ・里山を見る側と管理する側の意見を調整しながら今後の里山づくりにあたりたい。

12 里山と野生動物

代表：中野良樹子

里山の野生動物との共存を考える

●シンポジウム:

日時:6月21日
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F
(657教室)にて

基調講演 羽山 伸一
(日本獣医畜産大学獣医学部助教 野生動物学)

パネルディスカッション

- ・羽山伸一(同上)
- ・栗原 裕浩 (NPO法人千葉まちづくりサポートセンター 副代表)
- ・清水 享 (サージミヤウキ・電気機械研究員)
- ・後藤 豊浩 (帝京科学大理工学部アニマルサイエンス科4年)
- ・千葉県→市町村の担当者(予定)
- ・被害農家の方(予定)



会場写真



11 水循環

代表：加藤繁志

「健全な水循環」～恵み豊かな水を子どもたちへ～

●シンポジウム:

日時:5月21日
場所:中央学院大学6号館3F(635教室)にて
講演 佐倉 保夫氏 (千葉大理学部地球科学科)
事例発表
(1)「印刷物のみためし行動」 三好 隆史氏(千葉県県土整備部)
(2)「名戸ヶ谷浄水と子どもたち」 藤崎 将氏(名戸ヶ谷トップ育てる会)
(3)「手塚川協議会と里山の市民活動」 小野 由美子氏(はくろ・人と自然をつなぐ仲間)
意見交換会 コーディネーター 齋 和夫氏 (千葉工業大学生命環境科学)

●野外体験(予定)

「親子で体験: 船に乗って手賀沼の水調べ: 生き物探検」
日時:6月12(日)10:00~15:00
集合場所:手賀沼水の権前 場所:手賀沼周辺



会場写真



12 まとめ 野生動物対策は町ぐるみで

- 現状 ・外来種:面積の割りに多い外来生物
- ・農産物被害:被害額横ばい、無秩序な対策によるサル被害の拡大

- 結論 地域作りとリンクし、民間をも交えた野生動物被害対策
→ 住民への説明、理解
→ やる気の醸成、戦略計画の樹立

- 課題 ・子ども、女性も含めたさまざまな立場からの <地域の将来> イメージの構築
- ・専門技術者の配置、自然環境管理機関の創設



10 里山と観光

代表:橋山 武

里山の四季を活かした観光

●シンポジウム:

日時:5月21日
場所:我孫子市中央学院大学6号館3F
(634教室)にて
特別ゲストによる講演:
「里山とものずばりしさ」出演者:中村俊彦
講演:
「里山の四季を語る」 出演者:浅井桑男
グループ討論:
「里山イメージ作成」

●シンポジウム(予定)

日時:
6月18日(土)12:00から
会場:「車の駅」ローズマリー公園・丸山町
里山ハイキング
安馬谷の里山をハイキングし四季の里山を見学し
ます
6月19日(日) 9:00から
前日ハイキングした安馬谷の里山を題材に、里山の
価値について語り合います。またその価値をどう観光に結び
付けていくかの可能性について考えます。



会場写真



里やまの春 浅井桑男 画

11 まとめ

● 現状

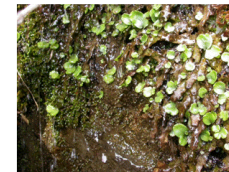
- ・印旛沼流域で県民:行政が水循環の健全化に取り組み始めている
- ・市民はや谷津田などで汚れた水の入り混じった中で活動をしている。

● 結論

- ・地域の肩が水循環をよくする
ということは何を望み、何を残すか、合意を得ること

● 課題

- ・地下水をいかに保つか・・・
- 雨水の浸透
灌漑域の保全...など
- ・地表に流れる豊かな水辺作り



13. 里山と文化・伝統

代表:加藤賢三

遺跡からみた里山景観

●シンポジウム:
日時:5月21日(土) 10:00~12:30
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F(656教室)

開催説明 加藤賢三(分科会代表)
●講演「遺跡からみた里山景観」
1. 縄文時代 土守英明
((財)千葉県文化センター上席研究員)
2. 弥生~中世 菅生 隆
(千葉県教育庁教育指導部文化財課
文化財保護室 主任文化財主事)
●意見交換 コーディネーター
西野 元(国土緑九学 文学部非常勤講師)



会場写真



●野外体験(予定)

場所:手賀沼および近郊
日時:6月12日(日) 10:00~15:00(小雨決行)
備考:我孫子市との共催、水循環分科会との協働

13. まとめ 遺跡に学ぶこれからの里山のあり方

●現状 私たちの暮らしは利便性を追求した結果大きく変わってきた



●結論 縄文時代から資源循環型社会が作られている。これをもう一度学ぶ。

●課題 利便性のカベをどう乗り越えられるか

14 里山と子どもの健康

代表:井村弘子

化学物質から子どもを守る

●シンポジウム:
日時:5月21日
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F(656教室)

講演 藤原寿和氏
(有害化学物質から子どもの健康を守る千葉県ネットワーク代表)

講演 粕着法子氏「佐倉からの報告」



会場写真

●シンポジウム(予定)

残土処分と森林保全

場所:市農サンプラザー
日時:6月25日(日) 9:50~12:00 見学
13:00~17:00 フォーラム 後援と討議会



14 まとめ 化学物質から子どもを守るために、私どもは地道な活動を皆でしていきましょう

●現状 子どもたちの間に化学物質による健康被害が確実に増加。しかし、国も県も化学物質への取り組みが遅れている現状がある。

市民は生活の利便追求のみに走り、そのリスクが子供らの将来に発生落すことを怠求しようとしていない現状である。

●結論 子どもたちの教育や過程の中で化学物質に關して不足している、色々な機会を通じて実態に対処する方法を知らせていくことが必要とおもわれます



●課題 世のお父さん、お母さんたちに、このあふれ出す有害化学物質を、間違、Vない情報として出すことが出来るかを、生活のなかの身近な化学物質と、その影響リスクを認識し、多くの市民に知らせるとともにメーカーや行政に対策を提案していくことを考える